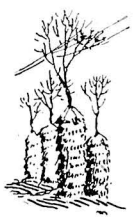
心理学講座たより

「心理学講座」第15回配本附録　東京都神田局区内神保町2の24　電車通り　株式会社　中山書店

精神薄弱の原因

西谷三四郎



流行は何もショート・スカートやヘップバーン髪型に限らない。これまでに病気やその治療といった大げさにいえば、いはば生命にかかわる事柄にもはやりすたりがあった。あるときにはビタミンがあらゆる病気の原因であり、従ってそれがあらゆる病気の治療に用いられた。つい最近の脳下垂体移植騒ぎもこれである。このような流行は一般大衆のもの好き心理（多分に好奇心プラス優越感）を利用した薬屋の宣伝や、医者の言葉に責任があるようである。

もっとも薬屋は金もうけだから当然であるとしても、すべて科学的良心をもたねばならぬ医者の軽率な言辞には困ったものである。じっくりと充分に慎重な実験や考慮もしないで、外国の受け売りや、思ひつきでのべられたことが、思わぬ効能をもつのである。これに類することが、精神薄弱の分野でもおこりつつある。

精神薄弱児の診察をするとき、学生に予診をとらせると、大低、家系にある負因については、かくして述べないで、いざ医者が診察のとき改めて詳しく訊くと、「実は……」といって白状する。

その反面、既往歴における疾病や外傷等を、非常に誇大視して、その精神欠陥の原因をそれに帰せしめがちである。

これは遺伝というレッテルを貼られるのを嫌がる人情からではあるが、このような態度から、また、精薄児を外へ出さず、内に閉じこめ、ひた隠しにかくす馬鹿げた親もあらわれる。

従来も精神薄弱を遺伝だけから発生してくるものとは考えないし、精神薄弱をきたす外因として、出産障害、脳炎、脳膜炎、外傷等の多くのものがあげられてきた。

ところが、最近の研究の進歩によって、胎内性の外因によって精神薄弱の或ものが起ることがわかってきた。

風疹やトキソプラスマがこれである。このような病気は前からある病気だが、精神薄弱と関係あると明らかにされたのは近年である。このことに剰戯されて内因とか遺伝とかいわれてきた精神薄弱の中には、この外にも多数に外因性のものがあるのではないかと考えられてきた。

ここまでは全く正当な考えの道すじだが、これから飛躍して、精神薄弱の大部分は、外因性（胎内性も後天性も含め）のものであって、遺伝的のものは

きわめて小数であるといいきるものがあらわれてきた。実に精薄児をもった親の考え方に、きわめて好都合というわけである。

この説の根拠として、多少とも発生異常のあるもの、即ち指紋異常、眼球異常、その他、形態異常を示してゐるものは、胎生期のそれぞれの組織の発生時期における外因の侵襲によって、正しい発生が妨げられたもので、すべて外因性と考えている。ここに問題がある。形態的異常が遺伝学的現象の重要なものであることは既に常識である。形態異常があることは直ちに胎生期の一時期における外因の侵襲を意味しないで寧ろ遺伝学的負因を意味するともいえる。

このような簡単な事実を無視して、即ち根拠にならぬ根拠をもって精薄の外因説をとくことは、軽率の嫌いをまぬがれない。

精薄双生児研究によっても、精薄が遺伝によって左右されることはきわめて明瞭である。しかし、精薄双生児の家系に必ずしゝ精薄者やその他の負因が見出されない。このことは精薄が優性遺伝でなく、きわめて複雑な形式をとる劣性遺伝であることを示すものである。

このようなことを考えれば、また、両親が家系に負因のあることを積極的に隠蔽しがちであることを考えるとき、われわれは出生後直ちにみられる発音障害はすべて一応内因性として取上げ、更に母体的条件を詳細に検討し、特別な外因のない場合は、内因性と決することがきわめて妥当であるしまた、家系に負因のあるときは特にこの考え方を支持するだらう。現在の科学の段階ではこれが適当なのである。

学問が進歩すれば従来の体系が崩れるのは、あらゆる科学にいえることで、精神薄弱についても同様である。問題は、現在の科学的良心に照して正しいか、忠実であるか否かなのである。

精神薄弱外因説は、精神薄弱児の親の人情にあたって、一般に広く流行しようとしていることを考えると、ことはきわめて重大である。「親よ、精薄は決して遺伝ではありませんよ」と呼びかけることは、慰めとしてはよいが、科学者の言葉としては、世を惑わすのそしりをうけないだらうか。

われわれの調査では、はっきりした外因というものは依然としてきわめてわずかで精薄の約一〇—二〇%位にしか達しないし多少とも内因の参与を認めたときの外因性のものをみても、三〇%あまりにしかならない。その他のものはすべて内因的劣弱といわなければならないのである。

これは単なる意見の相違というものではない。根拠をもって、学問的良心に基いて物をいうか否かの問題である。学問は宣伝でないから、政策や人情で真実が歪められてはならず、ファッション・モデルのように、流行に乗ることは充分に慎重な反省を必要とする。

（教育大助教授）

一九五三年度〈毎日出版文化賞〉受賞
日本生理学会編
生理学講座〔全18回完成〕
全巻 二、四〇〇円〔内容見本送呈〕

〔監修〕
北大教授 理学博士 内田亨
東大教授 理学博士 沼野井春雄
京都大教授 理学博士 上野益三
広島大教授 理学博士 堀川芳雄
三重県大水産学部長 理学博士 岡田彌一郎
教育大教授 理学博士 三輪知雄
国際基督教大教授 理学博士 篠遠喜人
東北大名誉教授 理学博士 吉井義次

生物学実験法講座（全12巻）
六月より刊行開始〔詳細内容見本送呈〕

—百数十氏執筆—

弁慶の人格構造について

戸川行男

弁慶の道具的反応は七種類しかない。厳密に言えば七つ道具の一つ一つを左手に持つ場合と、右手に持つ場合があり、更に七つの中の、任意の二つを左右に持つ場合があって、合計五十数種の道具的反応がありうるわけである。

しかしながら、これは反応を、道具的反応に局限して考えたからであって、弁慶にだってウィンクすることもあろうし、肘鉄砲も可能である。とすると、その反応の種類は、おびただしい数にのぼる筈である。「おびただしい数」という表現は大変に曖昧であるから、もう一歩すすんで考えてみて、彼の反応の多様性は果して有限であろうか。私はどうもそれが有限であるという考えに賛成しかねる。有限説を論理的に反駁することもできないが、同時に論証することもできないかと思う。

なるほど、ある時間点における弁慶を考えてみると、彼の先行経験は有限であるとみてよかろう。

それでもし、すべての反応が先行経験によってのみ規定されるものだとすれば、彼の反応の多様性は有限な筈である。

しかし、この仮定を支持すると、環境というものは、持ち合せの反応を引き出す役目をもつにすぎない。

人格Pの反応はPの先行経験によってのみ規定されるのであるから、行動Bは専らPの先行経験によってのみ規定され、環境Eはただ持ち合せの反応のどれを引き出すかの役割をもつにすぎない。

この考えは、しかし妥当であると思えない。弁慶がもしテレヴィーに出演したり、パチンコ屋にはいったり、ストリップを見たり、参議院選挙に当選したりしたとすれば、彼の過去において条件づけられていない反応が現われはしないかと思う。

それでもし新しい課題が新しい反応を生むものならば、環境の多様性が有限でない

一九五三年度〈毎日出版文化賞〉受賞

生物学大系（全8巻 完成！）

三重県農業試験場長 岡田彌一郎
東大水産学部長 理学博士 野口彌吉
東大理学博士 沼野井春雄
東大教授 農学博士 大槻虎男
お茶の水女子大理学部長 理学博士 三輪知雄
広島大教授 阿部余四男
奈良女子大教授 理学博士 小清水卓二
東大教授 理学博士 杉靖三郎

……監修……

〈氏余百者筆執全〉

〈毎日出版文化賞〉受賞理由

戦後における世界の生物学は、人間の幸福に本当に役立つ〝生命の科学〟として、動植物学のほか農学・医学等〝広く人生に直結する諸部門を綜合した一体化し、国民の大きなこの学問展望を示すに至ってなき世界観をうけ生き物教育が、根本的に転換せられ、〝なぜ生物学は〟という時代的要求に即応し、大系化は、当然前進的わかりやすく、内容の配列、カリキュラムを最大公約数的に新機軸を示し、原色版を配し、一般教養書としてもくしみや香り高い豊富な図版はなるべく親しみ易く、高等学校、中学校、高等学校の教科書に適する。

誰にでも常備寄与すべき書籍化行物である。

毎日新聞（28年11月2日）

各巻価一、二〇〇円〒65〔内容見本送呈〕

かぎり、反応の多様性もまた有限とはいいえないわけである。

つまりその日その日で弁慶の学習された反応というものを集計して行ったとしても、あしたの環境条件が予測できないとすれば、あしたの彼の行動は、これこれの中のどれか一つであるというような予測は成り立たないのではないか。

人間がピアノで環境がキーをたたいてくれるのならば、出てくる音の多様性は、何オクターブという範囲内にあるわけであるが、PとEとがぶつかってBという音が出るのだとするとき、Eがとんでもないものだと、とんでもない音が出ないものでもない。その日その日でピアノの構造を、つまり人格構造を、しらべてみたって、あしたの音楽は予測できない。

弁慶は立往生したが、その前に、東北地方の地理的環境を詳細にしらべ、かつ彼の人格構造を詳細にしらべておいたとしても立往生を予測しえたかどうか。やはりこれは彼の創意、つまり洞察的な新しい課題解決とみてやった方が親切ではないかと思う。

どうもそれやこれやで私などは、領域だ壁だ固いの軟いのという、畏友宮城音彌氏のいわゆる croquotte 模様に拍手を送る気になれないのである。人格構造というのは、PとEとがもみ合っているときのPの姿だけを、相手を抜きにして絵にかいたようなもので、牛若丸を抜きにして弁慶の中腰の姿勢だけをとりあげてみても、仕方がないと思う。われわれは二六時中、環境の課題ともみ合っているのであって、人格構造とか、反応傾向とか性格特徴とかの七つ道具をもってぶらぶら歩いているわけではなさそうである。

もっとも私は、弁慶に対する臨床的検索をおこなっていないのであるから、以上は単なる感想であって、しかとは断言いたしかねる。

（早大教授）

教育大学教授 文学博士 小保内虎夫著

心理学 ＝人間科学の基礎 定価三〇〇円 〒30

教育大教授 文学博士 小保内虎夫 著一

教育大助教授 文学博士 小笠原慈瑛 共一

教育大講師 辰野千寿

入門 心理実験法 定価二六〇円 〒30

日本応用心理学会大会 研究発表報告

応用心理学論文集 定価三〇〇円 〒50

九学会連合編集

人類科学〔Ⅵ〕 定価二〇〇円 〒50

＝「性・能登」調査報告＝

東大教授 農学博士 野口彌吉編

農業図説大系（全5巻）

第1回配本〈作物・育種〉好評再版出来！

第2回配本〈畜産・加工・蚕蚕〉発売！

北海道大学総長 農学博士 島善鄰

〃この大系は、農業の百科事典の役割を果すばかりでなく、農業の各分野にわたり、基礎から応用へと、大系的に、その発展進歩の姿を平易に、しかも相当高い水準をおとすことなく解説されているから、学生にも、また実務家にも、最良の参考書として推薦にあたいする〃

各巻定価八〇〇円 〒50

一時払特価三、七五〇円〔内容見本送呈〕

役に立つ科学の悩み

吉田　昇

学問というものは、すぐには生活の役に立たないものだときめてしまっている人がいる。この考え方が極端になってくると、生活の役に立ちそうもないことを研究していることが、一番学者らしく、学問に忠実な仕方だということになる。この立場にたつと、われわれのように教育学などをやっているものは、たいそう卑俗なものだときめつけられてしまう。

われわれは、この考え方に反撥しないわけにはゆかない。科学性というのは方法の問題で、対象の問題ではないのだから、生活にもっとも関係の深いことがらを、科学的に研究するのが一番大切なのだといってこれまでの伝統に異議を申したてる。

そうはいってみるものの、現実の教育学者や、現場の教師たちの実態をみていると役に立つ学問ということが、正しく理解されているかどうか、たいそう心配になってくることがある。

教育の問題を現場であつかっている人たちのあいだでは、役に立つことを求めすぎる傾向がみられる。考え方の過程をぬきにして、いきなり結論を求めることが多すぎる。講演をきいても、結局どうすればよいのかという質問が出るし、明日からの授業のときにどう使えばよいかと伺いをたてるという態度である。

こうなると、講演をしたり、本を書いたりする人の方も、その要求に応じて技術的な処理の仕方を説明するか、権威あるもののごとく宣託を下したりすることになる。

正常蓋然曲線がどういうものか、果して一学級の生徒の成績をこの形にするのがよいかどうか、そんなことはおかまいなしに学級の生徒の成績を五段階にする方法が教えられる。あるいは、何か新しい心理学的な研究が、教育上の問題を一挙に解決するように説かれたりする。

このような状況のもとでは、現実の問題に即するという条件はみたされるかも知れないが、科学性は稀薄になってしまう。

役に立つということが、この段階にあるかぎり、教育の進歩はないといってよい。この場合は科学がみずからの科学性を犠牲にして、他の目的に使われることを意味する。公平らしくみせたいために科学的な装いをつけたり、人目をひくような実践をしてみたいために、科学的な理論づけを求めたりする。この調子で行くと、一部のものに都合のよい教育をおしつけるために、心理学が利用されるというところまで行かないとはかぎらない。

役に立たないことをもって誇りとすることもおかしいが、役に立つことを急ぎすぎることも、たいへん危険なことだと思う。そこで、われわれがいいたいことは、教育の問題を考えるときに、一応明日の実践という固定的な角度をはなれて、人間や社会についての科学的な研究を虚心にあとづける必要があるということである。

教育者や教育学者が心理学の研究を学ぶ際に、何よりも大切なことは、研究の過程を通じて、科学的な態度を学びとることである。

この態度が、人間を対象として学びとられるならば、教育の目的や社会の問題についても、非科学的なゆがみを鵜呑みにはし

読者のページ

多忙のため詳細を読むことが仲々困難ですが、配本がくるたびに、一とおり、全体に目を通して、心理学の展望を知ることを、なによりの楽しみと思っています。

長野県諏訪市湯小路　児童相談所員　**栗林　公一**

講座の完成が近づきましたことをお喜びいたします。実験心理学について、重点的に解説願えたらよいと思っています。

福島市東浜町　学生　**佐藤　敏夫**

内容が広範囲にわたっているのは結構だが、論文によってはもう少し詳細に述べてほしいものがある。統計資料の説明、見方などが、やや不充分に思われ、折角のものがと残念である。

福島県甘木恵比須町　教職員　**平島　孝行**

一、体裁は単独に携帯読書が出来るのが便利。

二、自己の職能からして、非行、不良性の診断に当り、因子分析の必要があるので、この面の測定法と手引書などがあれば幸と思う。

長野市箱清水　法務技官　**小峯　友一**

紙質がよいので疲れたときに読めるのが良い。内容の面ではどれも待望したもので満足です。

神戸市灘区稗原町　療術師　**山根里人**

現在の心理学書中、内容は新らしくてよいと思う。分冊が多すぎて、各巻の系統がただちに判別できない点が不便に思われ、冊数は少く大きくまとめた方がよい。

宝塚市幸町　図書館員　**石井　勉**

編集部より

あわただしいうちに、いつしか新緑が目に映える候となりました。本講座もここに第十五回配本を終りまして、編集部一同、ようやく肩の重荷をおろした気持でおります。

前回までの本紙上で、再三お知らせ申し上げましたように、刊行当初全十二巻を十二回の配本予定で出発いたしましたが、進行途上におきまして、予定原稿枚数の増加や、新たな項目の追加などにより、来月の別回共十六回の配本のやむなきに至りました。来月、総索引と共に別掲の如き未収録の諸先生方の御原稿をあわせて、お届け申し上げ、それで本講座が有終の美をもって完成いたすこととなるわけでございます。

なにとぞ最後まで、皆様がたの御支援を、せつにお願い申し上げるしだいでございます。

（前頁の下段から続く）

ないようになるだろう。

実際的な目的意識が強く支配している人間や社会の領域で、正しい意味での役に立つ科学を育ててゆくことは困難である。しかし、最近、心理学、教育学、社会学の各領域が、いちじるしく歩みよってきたことは、われわれに明るい希望を投げかけている。役に立つ科学を育てることは、悩みも多いが、それだけにやりがいのある仕事だといえよう。

（お茶水女子大助教授）

心理学講座

〈最終回配本内容〉

神経間の伝導 ―シナップス機構― 教育大教授 医学博士 杉靖三郎

情緒感情論 東北大教授 文学博士 大脇義一

社会心理学の領域 東京工大教授 医学博士 宮城音弥

ヒューマン・エコロジー 日大教授 長谷川貢

現代の青年 (2) 東北大教授 教育学部長 松本金寿

総索引